次世代育成支援における祖父母の役割について
―母親の子育て不安とのかかわり―

三輪聖子，内田照彦，木澤光子
家政学部生活科学科生活科学専攻
（2005年11月９日受理）

The Role of Grandparents in Supporting the Development of the Next Generation
In relationship to anxiety towards mother's child raising abilities

Department of Home and Life Sciences, Faculty of Home Economics,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan（〒501－2592）

MIWA Satoko, UCHIDA Teruhiko and KIZAWA Mitsuko
（Received November 9，2005）

１．緒　　言

母親の子育て不安については，1980年代からおこなわれた牧野カツコによる一連の「育児不安」研究があげられる。牧野によれば「育児不安とは，子どもや子育てに対する蓄積された漫然とした恐れを含む情緒の状態」として定義づけている。育児不安というと不安という言葉から，子どもにかかわりすぎて生じる悩みや心配と捉えられやすいが，実は子どもにうまく関われない，関わることを拒否するといった自分の子どもを嫌うという状況も含まれるのである。それが，現代社会で多発する幼児虐待につながっているのである。

これらの育児不安研究の結果から，母親の育児不安は，夫婦関係が多大な影響を与えていることが明確化した。母親の職業の有無に関わらず，夫婦関係が良好で，父親が子育てに協力している，あるいは大変さを理解してくれているということが母親に意識できれば，育児不安は解消される，ということが明らかになった。

しかし，2000年に実施した旧高富町の調査から祖父母と同居している母親にも子育て不安があると伺われる結果が現れた。これまで祖父母が子育て支援の重要な資源の１つとして考えられ，親世代には，祖父母世代を十分活用することが望まれ，祖父母世代も孫育てを受け入れてきた。むしろ元気な高齢者活用とも考えられてきた。しかし，祖父母世代の意識も変容し，家で孫の世話をするよりも，もっと自分自身の生きがいのために旅行や趣味の世界を広げたいと考える祖父母世代が増加してきたと考えられる。さらに祖父母自身が支援者として十分な能力を持っているとはいえない状況も見受けられる。

そこで，本研究は祖父母の役割を中心に調査を実施し，母親の子育て不安と祖父母とのかかわりについて明らかにすることを目的とする。

２．方　　法

旧岐阜県武儀郡武儀町在住の乳幼児を持つ母親111名を対象に，留置き回収法によりアンケート調査を実施した。有効回収率は89.2%であった。

調査期間は2005年２月末～３月上旬，旧武儀町役場の協力を得て実施した。

調査内容は，子育ての実態，子育て意識，祖父母とのかかわりなど全17項目である。

３．結果と考察

①家族形態

家族形態は，表１のように核家族35.7%，夫の親と同居49.0%，自分の親と同居11.2%，夫のない家族3.1%，その他1.0%の割合であった。2000年国勢調査から見ると，核家族世帯は全体の60.5%，その他の親族世帯は9.1%と１割に満たない状況である。それに比べ本調査地は核家族の割合が少なく，三世代家族（その他の親族世帯）は60.2%であり，親との同居が多い地域である。ただし住まい方は，まったくの同居という人は，35.4%で，同一敷地内に別棟ですんでいる人も31.3%と多い。これは1950年代半ばの日本の状況と同様である。

表１　家族形態

	人	%
核家族	35	35.7
夫の親と同居	48	49.0
自分の親と同居	11	11.2
夫のない家族	3	3.1
その他	1	1.0

②母親の子育て意識

母親が考えている子育て意識は，「子どもが３歳くらいまでは母親が育てる」49.5%，「子どもが６歳くらいまでは母親が育てる」6.1%，「子どもが小学校までは母親が育てる」21.2%，「育児休業が終了したら保育所などに預けて働く」12.1%，「その他」10.1%となっている。この意識は，家族形態同様，かつての３歳児神話がいまだ存在していると思われる。

また，母親が日々の子育てを通してよく感じることは，「自分の時間がない」41.1%，「経済的に苦しい」30.1%，「夫とよく話し合う」30.1%，「精神的なゆとりがない」28.8%，「毎日同じことの繰り返しをしている」24.7%，「毎日くたくたに疲れる」23.3%が上位にあがっている（図１）。

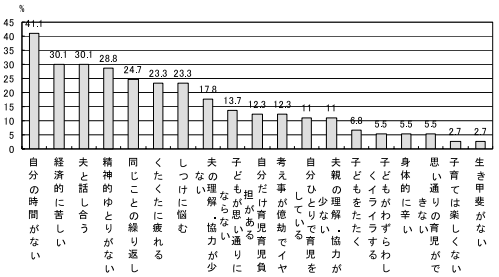

図１　母親の子育て意識

これを家族形態別で見ると図２のようになり，核家族の母親は，精神的ゆとりがなく，自分ひとりで子育てして育児負担が大きいと感じている。それに対し夫の親と同居している母親は，自分の時間がなく子どもが思い通りにならず，夫の親の協力が得られないと感じている。

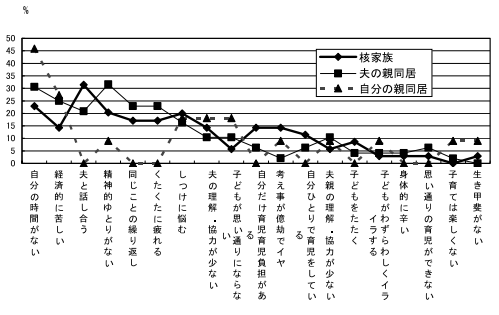

図２　家族形態と母親の子育て意識

③子育てに対する評価

家族形態別の子育て意識の平均値を算出したものが表２である。評価は「１　よくある」「２　時々ある」「３　あまりない」「４　まったくない」の４段階できいている。項目によってばらつきはあるものの，ほとんど中央値に近い。家族形態別で比較すると，核家族の平

均値が2.61で最も高く，子育てに対する不安は最も低い。夫の親と同居が平均値は2.52と最も低く，不安は高い。

表２　家族形態別子育て意識の平均値

項　　目	核家族平均値	夫の親と同居平均値	自分の親と同居平均値	P値
毎日くたくた疲れる	2.34	2.02	2.33	
考え事がおっくうでイヤになる	2.69	2.48	2.56	**
子どもがわずらわしくてイライラする	2.74	2.54	2.44	
自分一人で子育てしている感じがする	2.83	2.92	3.00	
毎日同じことの繰り返しをしていると感じる	2.26	2.23	2.44	
子育てを楽しくないと感じるときがある	2.94	2.75	2.78	
子どもをたたくときがある	2.63	2.67	2.78	
自分に精神的ゆとりがないと思う	2.31	2.17	2.33	
身体的に辛いと思う	2.83	2.58	2.56	
自分ばかりに育児の負担がかかっている	2.60	2.69	2.67	
自分の時間がないと思う	2.14	1.88	2.22	
子どもが思いどおりにならない	2.49	2.23	2.22	
夫の理解や協力が少ない	2.49	2.60	2.22	
夫の親の理解や協力が少ない	2.91	2.83	2.67	
自分の親の協力や理解が少ない	3.29	3.38	3.22	
自分の思いどおりの育児ができない	2.83	2.50	3.00	
生き甲斐がない	3.17	3.31	3.00	
経済的に苦しい	2.40	2.44	2.11	
しつけの仕方について悩む	2.23	2.17	2.00	
夫と子どもや子育てについて話合う	2.14	2.10	2.67	
平　均	2.61	2.52	2.56	

**P<0.01

これらの項目がどのような因子構造になっているか見出すために主因子解法による因子分析をおこなった。因子行列表を求めると図３のように第５因子まで抽出された。第Ⅰ因子は，子育てやしつけに悩む母親の因子。第Ⅱ因子は，夫の無理解や非協力の因子。第Ⅲ因子は，自分にゆとりが持てず疲れてしまう母親の因子。第Ⅳ因子は，夫の親への不満をもつ母親の因子。第Ⅴ因子は，自分の親への不満を持つ母親の因子とそれぞれ解釈することができる。

第Ⅰ因子は，自分の親・夫の親と同居の母親が多く親世代と同居することからくる精神的不安定感があると考えられる。第Ⅱ因子は，自分の親と同居の母親に多い傾向がある。第Ⅲ因子は，核家族の母親に多い。身体的疲労を感じ，物事を考えることさえ億劫に感じると評価している。第Ⅳ因子は，舅・姑の理解や協力が得られないことや自分の思い通りにならない不満である。第Ⅴ因子は，自分の親

表３　回転後の因子行列表（全体）

項　　目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
子どもがわずらわしくてイライラする	0.757				
子育てを楽しくないと感じるときがある	0.717				
子どもが思いどおりにならない	0.675				
しつけの仕方について悩む	0.653				
自分に精神的ゆとりがないと思う	0.559				
夫の親の理解や協力が少ない		0.833			
夫と子どもや子育てについて話合う		−0.716			
自分ばかりに育児の負担がかかっている		0.665			
自分一人で子育てしている感じがする		0.573			
生き甲斐がない		0.337			
毎日くたくた疲れる			0.820		
自分の時間がないと思う			0.753		
考え事がおっくうでイヤになる			0.628		
身体的に辛いと思う			0.532		
夫の親の理解や協力が少ない				0.745	
自分の思いどおりの育児ができない				0.580	
毎日同じことの繰り返しをしていると感じる				0.528	
自分の親の紀要力や理解が少ない					0.647
経済的に苦しい					0.647
子どもをたたくときがある					0.596

の理解や協力に不満をもつ因子であるが，ここに含まれる人は多くなく全体的に見るとこの項目は家族形態に関わらず協力が少なくはない，つまり協力を得られていると感じている。

④子どもの心配事

子どもの心配事の順位は，１位-わがまま，２位-食事，３位-成長・発達，４位-反抗，５位-落ち着きなしである（図３）。

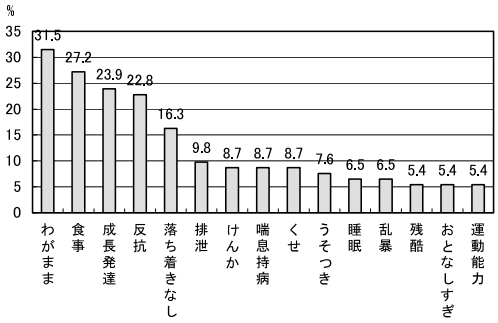

図３　母親の子ども対する心配事

心配事の１～５位を家族形態別に見ると図４のようになり，核家族と比べ，夫の親と同居の場合は，わがまま，食事，反抗の割合が非常に高くなっている。日頃の祖父母の甘やかしが，わがままや反抗，あるいは好き嫌いがあって食べてくれないなど，母親の心配事を引き起こしているのではないかと考えられる。さらに上位の心配事だけでなくケンカやうそをつくなどでも同様の結果となっている。それに対し，子どもの成長・発達の心配事は，子育て経験の少ない母親のみの核家族が多くなっており，親のアドバイスがすぐに受けられず心配することが多くなっているのではないか。母親の心配事は，夫の親と同居している場合に多く，祖父母と孫のかかわり方，嫁姑とのかかわり方が影響していると考えられる。

子育て支援に対する家族への要望の自由記述に「食事前におやつを与えないでほしい」

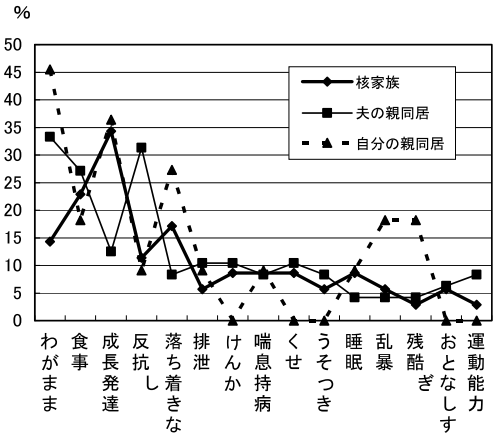

図４　家族構成と母親の子どもに対する心配事

「甘やかしすぎず，しかってほしい」「祖父母が子どもにうそを教えたり，嫌がることを言ったりしないでほしい」「しつけを親に合わせてほしい」といった要望があり，母親にとって同居する義父母と子育てについては問題も少なくない。

⑤子育ての相談相手

子育てに悩んだとき誰に相談するかは，１位-夫77.8%，２位-実 母67.7%，３位-友 人56.6%，４位-義母25.3%，５位-きょうだい23.2%である。夫は父親であり当然のことと思われるが，夫婦以外では，実母が圧倒的に多く，次いで友人となっており友人の存在は大きいと思われる。同居している割合が高い義母は４位であり，身近な相談者になりうるにも関わらず，相談する母親は多くない。

４．要　　約

本調査から明らかになったことを要約すると次のようになる。

①家族形態は，三世代同居の過去的要素が強く残存し，母親の意識も子育ては母親の手で育てたほうがよいという意識が強い。

②核家族の母親は，精神的ゆとりがなく，自分ひとりで子育てして育児負担が大きいと感じている。それに対し夫の親と同居している

母親は，自分の時間がなく子どもが思い通りにならず，夫の親の協力が得られないと感じている。

③子育てに対する評価は，核家族の子育てに対する不安が最も低く，夫の親と同居が最も高くなっている。

④子どもの心配事は，夫の親と同居の場合に，わがまま，食事，反抗の割合が非常に高くなっている。また，子どもの成長・発達の心配事は，子育て経験の少ない母親のみの核家族が多くなっている。

⑤相談相手について，夫は父親であり当然のことと思われるが，夫婦以外では，実母が圧倒的に多く，次いで友人となっており友人の存在は大きいと思われる。

現代の社会問題の１つである少子化は，国として将来の存亡をかけて取り組まなければならない大きな課題である。しかし，今回の調査結果からも明らかになったように，地域によって現状が大きく異なっているということである。日本全国一律の支援をしてもその地域に適合したものでなければ意味がない。これまで，女性の社会進出という課題に対し元気な高齢者つまり祖父母世代の活用が叫ばれてきたが，家族として同居している祖父母世代と子育ての関わりは，すべて良好といえるものではないことがわかった。これは自分の親であっても，問題は少なくないこともわかった。つまり，祖父母の役割が，母親の子育て支援に有効に作用しているとはいいがたい状況が見られる。

今回は，母親のみを対象に調査したが，祖父母についても孫育てについてどのように考えているか調査する必要がある。

参考文献

１）牧野カツコ「育児における＜不安＞について」『家庭教育研究所紀要２』1981
２）牧野カツコ「乳幼児を持つ母親の生活と＜育児不安＞」『家庭教育研究所紀要３』1981
３）牧野カツコ「働く母親と育児不安」『家庭教育研究所紀要４』1981